

平安京右京六条三坊二町跡

2004年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

平安京右京六条三坊二町跡

2004年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生きています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来1200年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じて広く公開することで市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用をはかっていきたいと願っています。

研究所では、平成13年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平米から、数千平米におよぶ大規模調査までありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたびマンション建設に伴います平安京跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げます次第です。

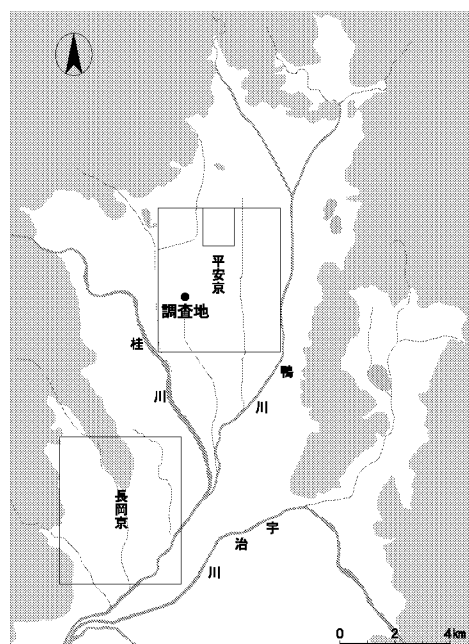
平成16年2月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 平安京右京六条三坊二町跡
- 2 調査所在地 京都市右京区西院寿町 8 番地他
- 3 委 託 者 サムティ開発株式会社 代表取締役 森山 茂
- 4 調査期間 2003年10月 6 日～2003年11月28日
- 5 調査面積 478m²
- 6 調査担当者 百瀬正恒
- 7 使用地図 図 1 は、京都市発行の都市計画基本図（縮尺 1：2,500）「西京極」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 日本測地系（改正前）平面直角座標系（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用基準点 京都市が設置した京都市遺跡測量基準点（一級基準点）を使用した。
- 11 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 12 遺 構 番 号 通し番号を付し、遺構種類を前に付けた。
- 13 遺 物 番 号 土器類・石製品・木製品に通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 14 掲 載 写 真 村井伸也・幸明綾子・百瀬正恒
- 15 基準点測量 宮原健吾
- 16 遺 物 復 元 村上 勉・出水みゆき
- 17 本書作成 百瀬正恒
- 18 編集・調整 児玉光世・清藤玲子
- 19 執筆分担 百瀬正恒が執筆したものに長宗 繁一が修正・加筆した。



（調査地点図）

目 次

1 . 調査経過	1
2 . 調査地点の位置と環境	2
3 . 遺 構	3
(1) 概 説	3
(2) 1 区の層序と遺構	3
(3) 2 区の層序と遺構	6
4 . 遺 物	9
(1) 土器類	9
(2) 瓦 類	13
(3) 石製品	13
(4) 木製品	13
5 . ま と め	15

図 版 目 次

図版 1	遺構	1	1 区 1 a面全景 (北から)
		2	1 区 2 a面全景 (北から)
図版 2	遺構	1	2 区 1 b面全景 (北から)
		2	2 区 2 a面全景 (北から)
図版 3	遺構	1	1 区樋口小路南側溝東壁断面
		2	2 区SE200全景 (東から)
図版 4	遺構	1	SA 1 のP79
		2	SA 1 のP79底部
		3	SA 1 のP80
		4	SA 1 のP84
		5	SB 2 のP119断割状況
		6	SB 2 のP162断割状況
		7	P73断割状況
		8	P86
図版 5	遺物		出土土器

挿 図 目 次

図 1	調査位置図 (1 : 2,500)	1
図 2	調査前全景 (北から)	2
図 3	調査風景 (西から)	2
図 4	右京六条三坊二町調査区配置図 (1 : 2,000)	2
図 5	1 区遺構実測図 (1 : 200)	4
図 6	2 区 1 a 面遺構平面図 (1 : 200)	5
図 7	2 区 1 b 面遺構平面図 (1 : 200)	5
図 8	2 区 2 a ・ b 面遺構実測図 (1 : 200)	6
図 9	2 区 SB 2 遺構実測図 (1 : 100)	7
図 10	2 区 SE200 遺構実測図 (1 : 50)	8
図 11	遺物実測図 1 (1 : 4)	10
図 12	遺物実測図 2 (1 : 4)	12
図 13	木製品実測図 (1 : 4)	13
図 14	曲物	13
図 15	折敷	13
図 16	SE200 井戸枳板実測図 (1 : 10)	14
図 17	SE200 井戸枳板	14
図 18	周辺遺構関連図 (1 : 500)	16

表 目 次

表 1	遺構概要表	3
表 2	遺物概要表	9

平安京右京六条三坊二町跡

1. 調査経緯

調査は、サムティ開発株式会社による、マンション建設に関する事前調査として実施した。地点は京都市右京区西院寿町8他で、佐井通五条上の場所である(図1)。

調査に先行して、京都市埋蔵文化財調査センターにより試掘調査が行われ、平安時代前期の建物遺構が発見されたため、発掘調査を指導し、当研究所が2003年10月1日から11月28日まで発掘調査を実施した。

調査区は、当初、遺構が顕著であった敷地の東側を中心とする予定であったが、樋口小路の検出が敷地の北張り出し部に予想されたため、2箇所に分けて設定した。北西部の小規模なトレンチを1区として、南北に15m、東西6mの約90㎡のトレンチを、試掘調査で建物遺構が検出された地点を2区として、南北に30m、東西12mの約360㎡のトレンチを設けて実施した。

調査前の敷地は、整地されていたが、北側が高く、南に低く傾斜していた。

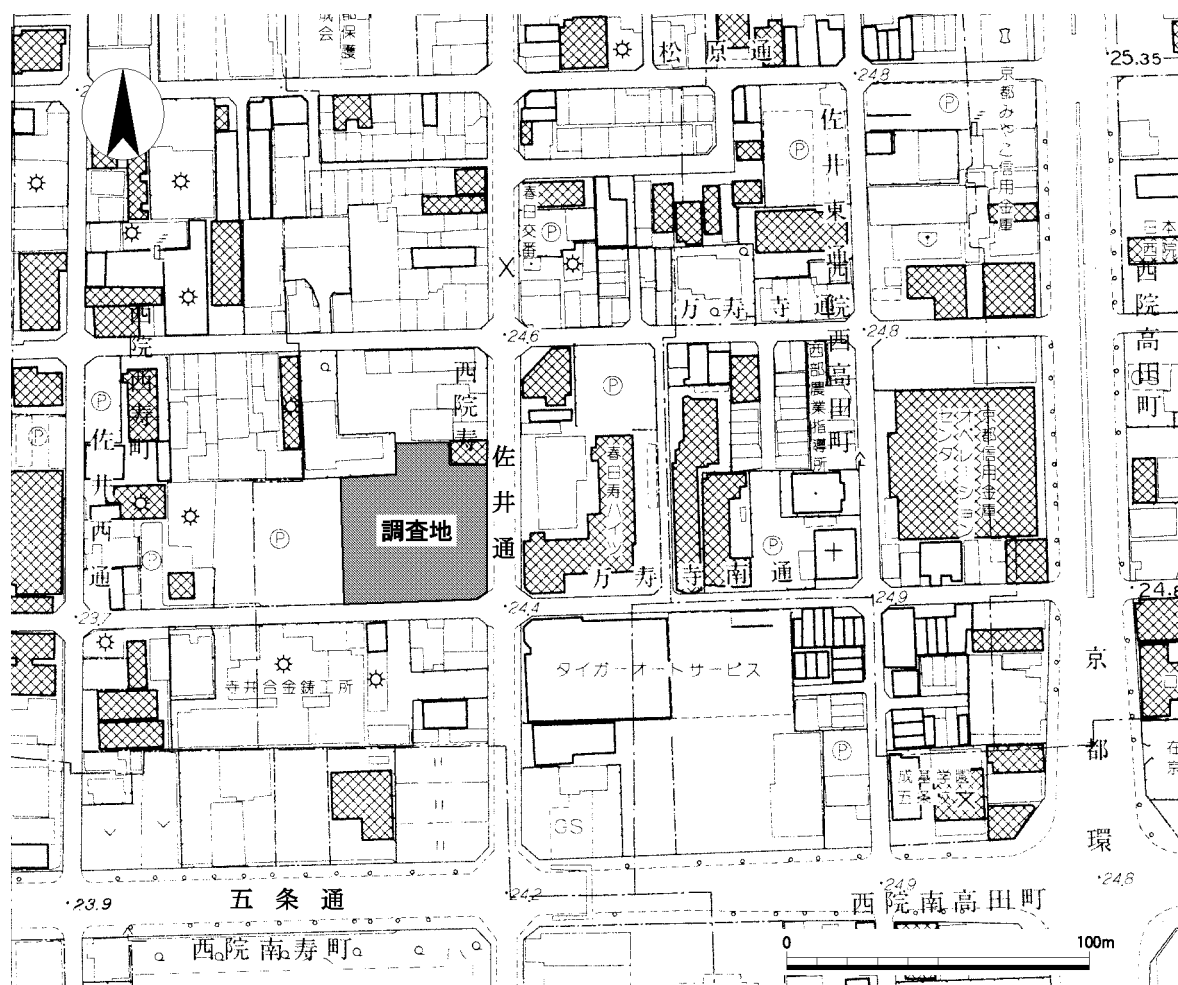


図1 調査位置図(1:2,500)



図2 調査前全景（北から）



図3 調査風景（西から）

2. 調査地点の位置と環境

今回の調査地点は、平安京右京六条三坊二町の北東隅にあたり、敷地の北に樋口小路、東に道祖大路が推定される。四行八門制では、東一行北一・二・三门となる（図4）。また、弥生時代から古墳時代の遺跡である西院遺跡にも含まれている。

既往の発掘調査は同町には無く、当調査地の南東約40mの地点で昭和63年度に実施した右京六条二坊十五町の調査が最も近い¹⁾。同調査では、道祖大路の東側溝と築地、築地推定部分の柵、路面内では南北に流れる流路の東肩部などを検出している。

右京六条二坊内の調査をしてみると、西側の七・八・九・十町で大規模な調査²⁾が2001年に実施され、1町や半町占地の大規模な邸宅跡、建物や池状遺構、樋口小路や馬代小路などの条坊関連

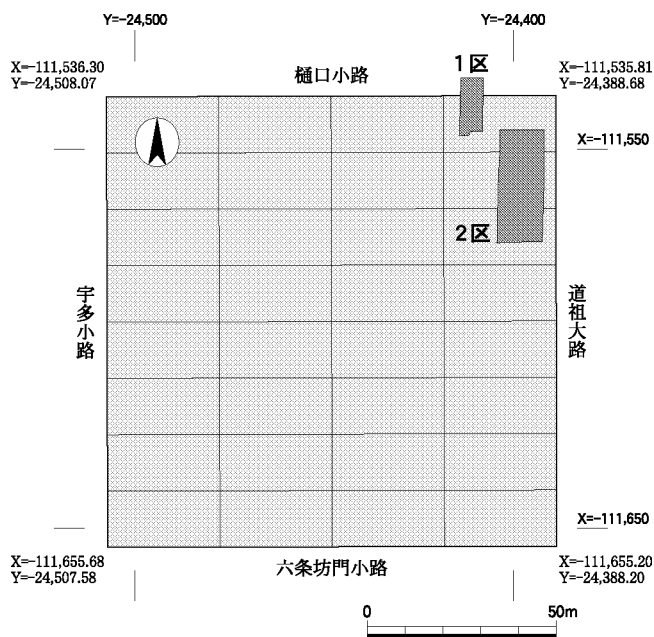


図4 右京六条三坊二町調査区配置図（1：2,000）

遺構などが検出されている。また、四町の調査で、四面に廂を持つ南北棟の大型建物が町の北半中央で検出されている³⁾。他の調査でも多くの建物や井戸が検出されており、同坊には概して規模の大きな宅地が設定されているようである。これらの遺構の時期は、ほぼ平安時代中期には廃絶していることから、同坊の宅地のあり方は、平安京初期の宅地班給や建物の配置、さらにはその規模を知ることができる地域であることがわかると同時に、平安時代中期以降には利用が認められなくなる様相を読み取れる。

3. 遺 構

(1) 概 説

敷地の北部に推定される樋口小路と二町の宅地内の様子を把握するために、2箇所調査地を設定した。北西部を1区、南東部を2区として実施した。また、2区は調査の終盤で南側に小規模な拡張を行い、遺構の把握に努めた。

1区は、南半に大規模な攪乱があり、検出された遺構は少ないが、推定通りに樋口小路の南側溝を検出することができた。2区の調査では北部の一部に攪乱があったが、おおむね良好な状態で、平安時代から近代に至る各時代の遺構を検出した。

以下、各トレンチごとに分け、遺構の時代が新しいものから順次概説する。

(2) 1区の層序と遺構(図5)

3面(1a・1b・2a面)で遺構の検出を行い、平安時代前期から近世にわたる各時代の遺構・遺物を確認している。

近世から近代の遺構

近代の水田耕作に伴う第2層を除去した1a面で検出した。耕作溝・土壌などがあるが、数は少ない。

SD1～7 耕作に関係する溝である。幅が大きなものでも0.25m前後で、深さは0.05mと浅い。

SK9～11 小規模な土壌で、出土遺物も細片で、その性格はわからない。

中世の遺構

第3層の10YR4/4褐色砂泥層を掘削した面で検出した遺構で、1b面として調査した。2区と一連の南北方向の耕作に関係すると想定できる溝がある。

SD12～14 3本の南北溝が並行して存在する。SD12は幅が0.8m前後で、深さは0.15m程あるが、途中で途切れ南側では検出できなかった。SD13は幅が0.9m前後で、規模が大きい。各溝からは平安時代前期を中心とした細片の遺物が出土したが、掘削時期や機能していた時間を示す

表1 遺構概要表

時 代	遺 構	
	1 区	2 区
近世～近代	SD1～7、SK9～11	SD1・2・6、SD3～5・7～24
平安時代後期～中世	SD12～14	SD25～29
平安時代前期	SD15、SD16・18～24、SX17	SB1～3、SA1・2、SE200、SD100、SK41

遺物は出土しなかった。しかし、後述する2区の関係遺構から鎌倉時代の遺物が出土しているの
で、この溝群も当該期であろう。

平安時代の遺構

第4層の2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥層を掘り下げた面で検出し、2a面とした平安時代前期の遺
構群である。

SD15（樋口小路南側溝） 幅が2.5m前後の東西溝で、検出面から0.8mが底になる。断面のプ
ランはU字形であるが、中央部の0.5m程は0.1m程一段と深く掘り込まれ、暗灰色泥土が堆積し
ていた。堆積土層は大きく3層に分かれ、上層は7.5YR4/2灰褐色砂泥層で炭を少量含んでいた。
中層は、10YR4/2灰黄褐色砂泥層で、この層にも炭が含まれていた。下層は、2.5Y4/2暗灰黄色
砂礫層で、5cm前後の砂礫を主体とする層である。底の中央部に泥土層が堆積していた事を含め
て考えると、当初は幅が狭い溝が掘られていて、流れも緩やかであったが、後に流量の増加に応
じて幅を拡げて、砂礫の流れる本格的な流路にしたことが想定される。下層を中心に平安時代前
期の遺物が出土したが、底からは小型の平瓶がほぼ完形で出土した。

2b面では多数の溝を検出した。方向は南北と東西が共にあり、切り合い関係はなく、同時に併
存していたことがわかる。

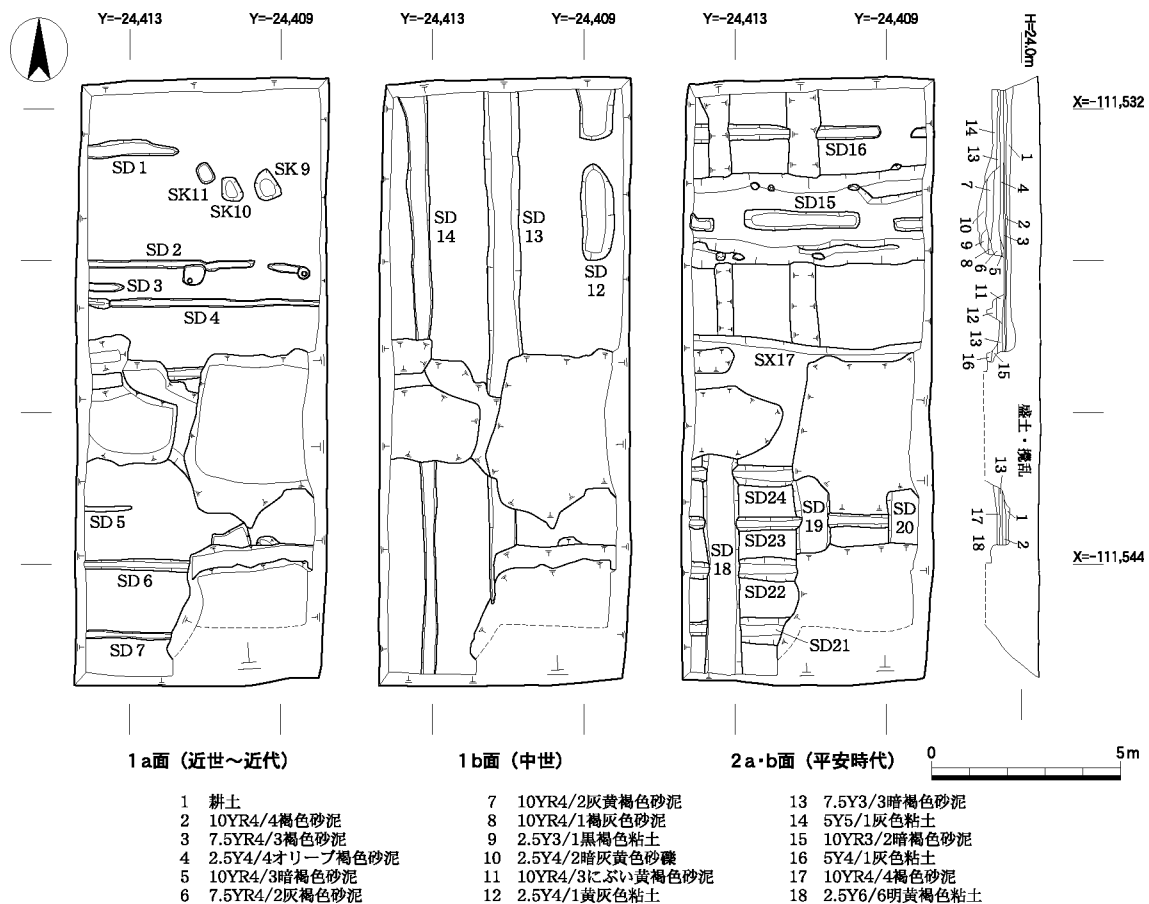


図5 1区遺構実測図（1：200）

SD18～20 南北溝でSD18・19は、1b面で検出したSD13・14とほぼ重なる。溝幅は0.2～0.4mと一定しない。

SD16・21～24 東西溝で、SD15の北部でSD16を、他は南部で検出した。幅は0.3～0.7mで、大小があるが、深さは0.1mでほぼ一定していた。

これらの溝は当地が都城に組み込まれ、宅地化する過程で、土地を乾燥させるために掘られた溝と想定される。

SX17 落ち込み状の遺構で、深さは0.1m前後が多く一定しないが、東部では0.4mほどあり、深い。平安時代前期の遺物が少量出土した。

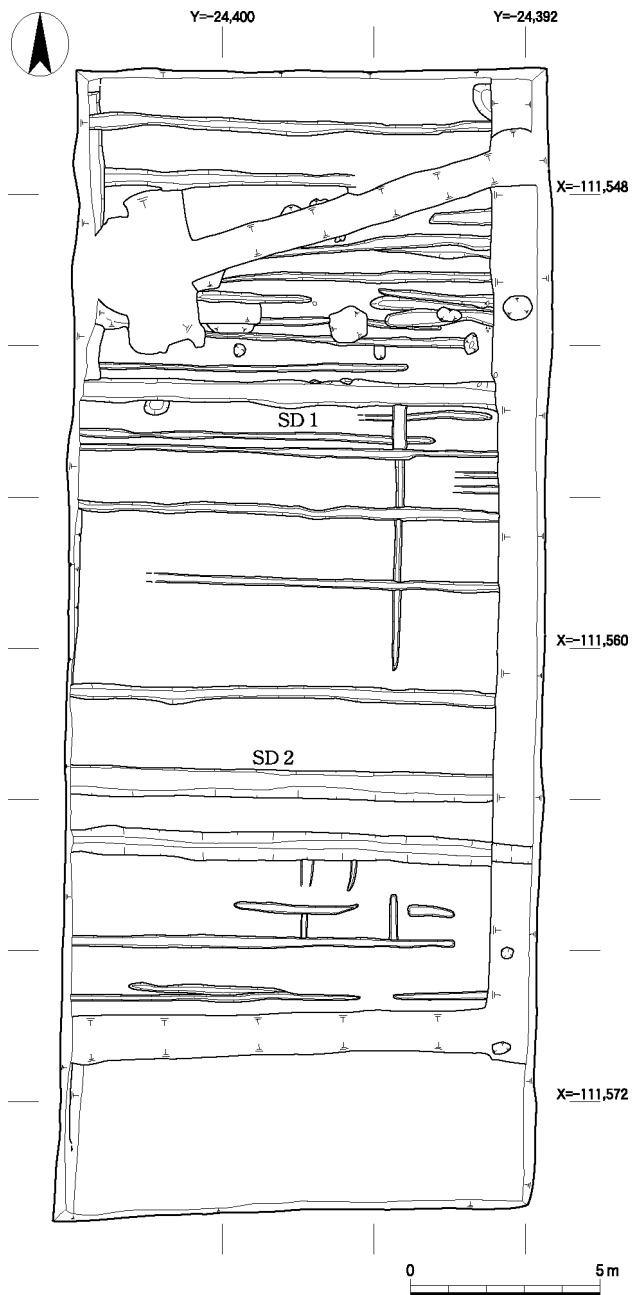


図6 2区1a面遺構平面図(1:200)

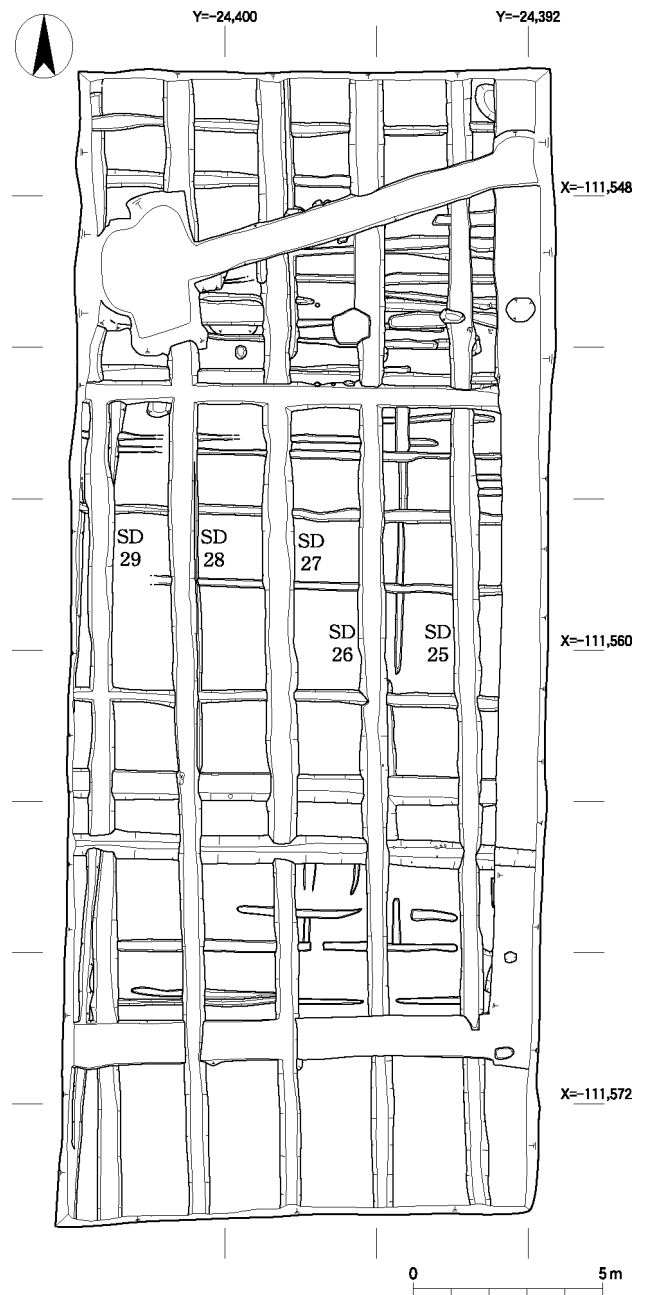


図7 2区1b面遺構平面図(1:200)

(3) 2区の層序と遺構(図6~10)

調査開始前は南北75m前後の水田と宅地が3区画存在した。西区画水田は東の境界がトレンチ北部ではY=-28,941m前後にあり、西側の1.5mほどはトレンチ外であったが、ほぼ完掘できた。

中央区画は宅地化されていたが、完掘することができた。東区画も宅地化されていて、その西側境界痕跡はY=-28,911m前後にあり、東西幅では2.5mほどが調査できた。このトレンチでは、縄文時代晩期から近世にわたる、各時代の遺構・遺物を確認した。

東壁南端部のX=-117,154m地点の基本土層は、1層 - 盛土層、2層 - 10YR4/4褐色泥砂層、3層 - 10YR5/3にぶい黄褐色泥砂層、4層 - 10YR5/4にぶい黄褐色泥砂層、5層 - 10YR5/1にぶい黄褐色泥砂層、6層 - 10YR5/4にぶい黄褐色泥砂層、7層 - 10YR5/3にぶい黄褐色粘質泥砂層である。1区と同様、1a面、1b面、2a・b面の3面で遺構を検出した。

近世から近代の遺構(図6)

1a面で検出した遺構である。

SD1・2・6 近代の耕作に関係する溝で、工場に伴う造成まで機能した用排水路である。南北溝がSD6で、トレンチの西端で検出した。東西溝は2本検出し、北側がSD1、南側がSD2である。南北の間隔は溝の中心で12mあり、東西に細長い水田に想定される。

これ以外にも多数の耕作に伴う小溝を検出している。

中世の遺構(図7)

1b面で検出した遺構である。

SD25~29 南北溝を5本検出した。

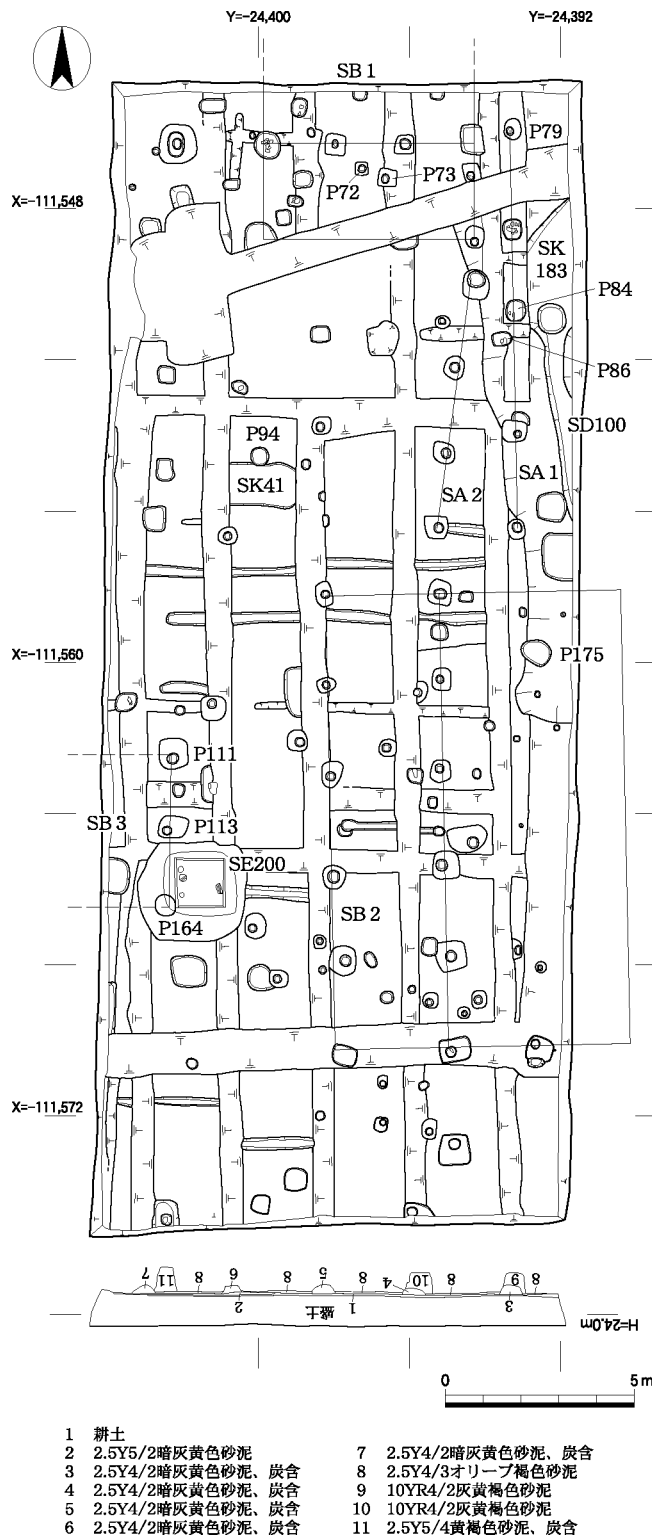


図8 2区2a・b面遺構実測図(1:200)

幅は0.4～0.6m、深さは0.2～0.3mであり、その間隔も2.4mと、ほぼ一定である。堆積土層は灰色泥土層が主体で、帯水した痕跡が明瞭にある。出土遺物は大半が細片となった平安時代前期の土器であるが、少量平安時代後期から中世の遺物が混じり、当地が宅地から耕作地に転換した後の遺構と推定される。規模が同じで、等間隔で存在すること、1区でも同様の状況で確認できること、中世から近世の耕作溝と比べると深く、規模も大きいことなどから判断すると、当該地を耕作地に転換させるための溝と判断される。

平安時代の遺構（図8）

2a・b面で検出した遺構である。建物・井戸・土壇・溝などがある。

SB1 3間×1間の東西棟建物で、北側に身舎があり、南側の底部分の可能性もある。梁行は1.8m、桁行は2.4mである。南柱列の両隅柱の底には、径10cm前後の根石が10数個あり、後者の可能性が高い。

SB2（図9） 5間×2間の身舎に西庇が付く南北棟建物とみられるが、東半分は調査区外となる。梁行2.4m、桁行2.4m、底の出3.0mを測る。柱穴掘形の規模は一辺0.6m前後の隅丸方形で、柱当たりは0.2m前後であった。身舎の北から1間目の柱穴P119（図版4-5）には径0.15mの柱が遺存し、心材を使っていた。

SB3 西部で検出した建物であるが、東側柱だけの検出で、全体の構造は不明である。柱掘形は、一辺が0.7mの隅丸方形で、柱当たりは0.2mほどである。柱間は2.2mであった。南端の柱穴P164は井戸が埋められた後に掘削され、前後関係がある。

SA1 南北方向の柵列で、柱穴は5基検出した。掘形は0.5m前後の隅丸方形で、深さは0.2m前後、柱当たりのわかるものは0.15mほどであった。柱間は北から2.5m、2.1m、

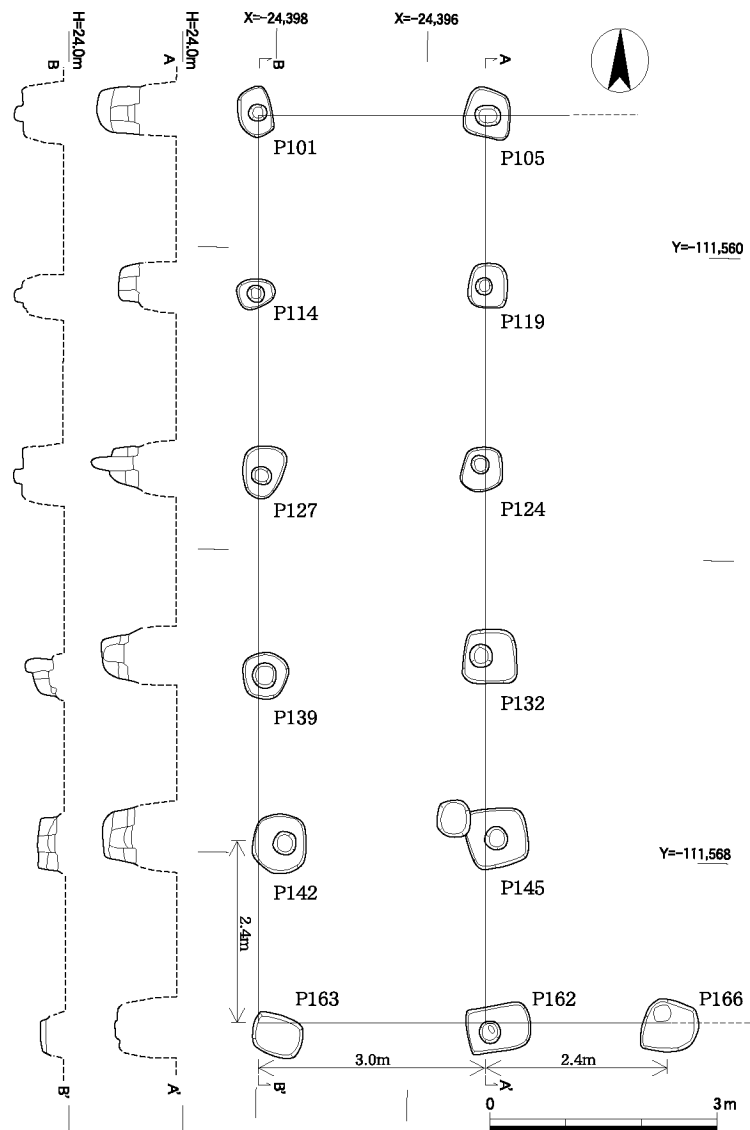
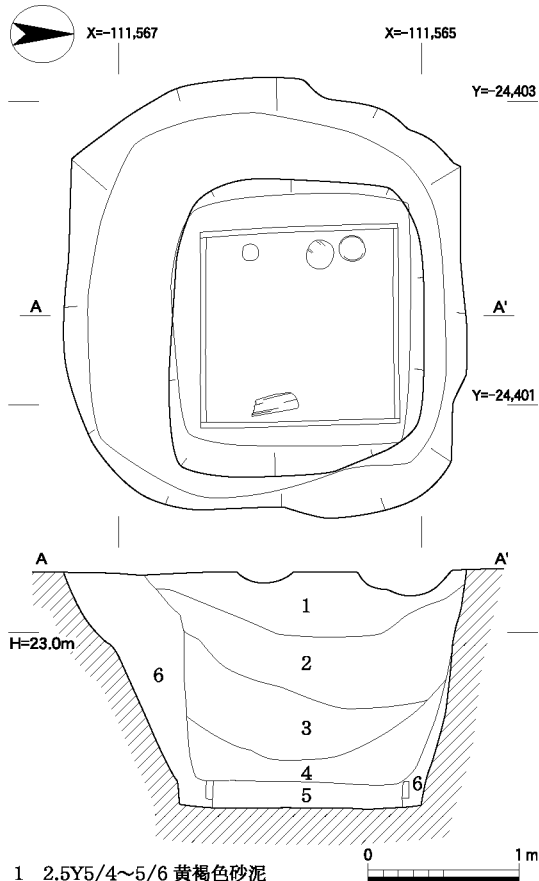


図9 2区SB2遺構実測図（1：100）



- 1 2.5Y5/4~5/6 黄褐色砂泥
- 2 10YR3/1 黒褐色粘土、炭含む
- 3 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土、φ1~3cmの礫多量含む
- 4 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土、φ1~2cmの礫多量含む
- 5 2.5Y3/2 黒褐色粘土、φ1~7cmの礫多く含む
- 6 2.5Y4/1 黄灰色砂礫、粘土混じる、φ1~5cmの礫多い

図10 2区SE200遺構実測図(1:50)

層を主体とする。5層は、井戸内の堆積層で、黒褐色粘土層。6層は井戸の構築に伴う土層で、黄灰色砂礫層に粘土が混じる土層である。

遺物は、2層の黒褐色粘土層から、9世紀第2四半期のものを中心に比較的多くが出土したが、底からは完形土師器椀・折敷の底部破片と曲物の底板・湾曲をした蔓状植物が各1点あるのみで少ない。最上層の窪みを埋めた土層からは、9世紀後半の土器が少量出土した。

検出状況と出土遺物から判断して、9世紀初めに井戸として掘削したが、礫層から湧水が少ないために早晩廃棄され、基底部の4枚の枠板を残して撤去され、別の場所に造り代えられたものと思われる。

SD100 2区の北東部で検出した河川跡で、西肩部だけを南北に10mほど確認した。2段に落ち込んでおり、この部分はSK183として掘り進めた。この部分には黒色の泥土層が堆積していた。柵01はこの土層の上面から成立している。

SK41 長辺1.7m、短辺1.1mをした長方形の土溝で、深さは0.1mと浅い。東西を中世の溝で破壊されているが、その外には広がらないことから、およその規模がわかる。9世紀中葉の遺物が少量出土した。

3.0m、2.6mと揃わない。北端の柱穴P79(図版4-1・2)の底からは、最上面に土師器甕の破片、次に高杯の杯部、下面には緑釉陶器素地皿が正位置で据えられ、祭祀が行われたことがわかる。

SA2 SA1の西側で検出した。4基の柱があり、3間分となる。柱の規模はSA1と同様で、柱間は北から2.1m、2.1m、2.6mとなる。北で東に大きく振れる。

SE200(図10) 方形の井戸で、掘形は南北2.6m、東西2.8mある。深さは検出面から1.5mで砂礫層の底になる。井籠組の井戸枠は最下部の1段だけが掘形の北部に設置されていて、それ以外は撤去されていた。板材は、厚さが4.5cm、長さが133cmで、幅は12cm前後である。南と北辺は幅5cmほどの切り欠きを作り、対する西と東の枠は両端を突出させ、組み合わせていた。

堆積土層は大きく6層あり、1・2層は抜き後が凹んでいたところに堆積した土層で、黒褐色粘土層などを主体とする。3・4層は井戸枠を抜いた時の土層で、礫混じりの暗灰黄色粘土

4 . 遺 物

平安時代前期から近代にわたる各時代の遺物が出土した。

出土遺物は整理箱にして33箱分出土しており、そのほとんどが土器類で、少量の瓦があり、瓦当もある。ここではまとめて出土した、平安時代前期の遺物を中心に記述する。なお、墨書土器や硯などは出土していない。

中世の遺物は、耕作に關係する溝や包含層から少量の遺物が出土した。土師器・瓦器・中世須恵器・中世陶器・中国青磁などで、総数は50点前後で少ない。その所属時期は鎌倉時代から室町時代のものである。

平安時代前期の遺物は、土師器・黒色土器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器などの土器類と、木製品、石製品がある。土師器の器形には、杯・皿・椀・高杯・鉢・甕があり、黒色土器には、杯と甕が出土した。須恵器は、杯A・B、壺・甕などがある。灰釉陶器には、杯・皿・壺が、緑釉陶器には、椀がある。特徴的な遺物では、井戸の底部から伏せた状態で出土した土師器椀、井戸の窪みから出土した土師器盤がある。以下、個別に遺構ごとに述べる。

(1) 土器類 (図11・12 1 ~ 36)

SE200出土土器 (1 ~ 9)

土師器椀 (1) 井戸の底から出土した土器で、口径は12.3cm、器高は3.9cmで、外面をヘラケズリするが、端部には及ばない。体部の下半に一辺3cmの線が三角形に刻まれている。

土師器皿 (2) 体部外面をヨコナデ、底部は未調整の皿で、口径は16.0cm、器高は1.9cmある。

土師器杯 (3) 外面全体をヘラケズリ調整する杯で、口縁端部直下だけ、ナデが強いためにケズリが及ばない。口径は17.0cm、器高は4.0cmある。

土師器鉢 (4) 平安京では出土例の少ない小型の鉢で、外面端部は強くナデて屈曲し、体部外面は未調整である。口径は17.4cm、器高は4.8cmある。

表2 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
近世～近代	土師器、国産陶磁器				
平安時代後期～中世	土師器、瓦器、青磁				
平安時代前期	土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、石製品、木製品、井戸枠		土師器19点、黒色土器1点、須恵器8点、緑釉陶器5点、灰釉陶器3点、石製品1点、木製品3点、井戸枠4点		
合 計		37箱	44点 (6 箱)	1 箱	30箱

コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より4箱多くなっている。

土師器杯 B (5・6) 高台のある杯で、底部から直線的に体部と口縁部が開く器形で、体部外面と口縁部をヘラケズりするが、下半部のケズリは幅が狭く、ミガキ状になる。口径は19.0～20.3cm、器高は5.2cm前後である。

土師器盤 (7) 大型の盤で、端部は少し内側に巻き込み、高台は低い。外面はヘラケズりするが、ミガキはない。底部はヨコナデ調整する。口径29.8cm、器高4.6cmである。

土師器甕 (8) 体部を八ケ調整する甕で、口縁端部はわずかに巻き込む。内面は細かな八ケ目調整し、口径は17.0cmである。

灰釉陶器皿 (9) 口径14.8cm、器高3.4cmとやや深めの皿で、体部外面はロクロナデ調整する。見込み部は使用のためすり減っている。

樋口小路南側溝SD15出土土器 (10～16)

土師器椀 (10) 口径13.2cm、器高3.5cmの椀で、体部外面はヨコナデするが、赤色のスリップ

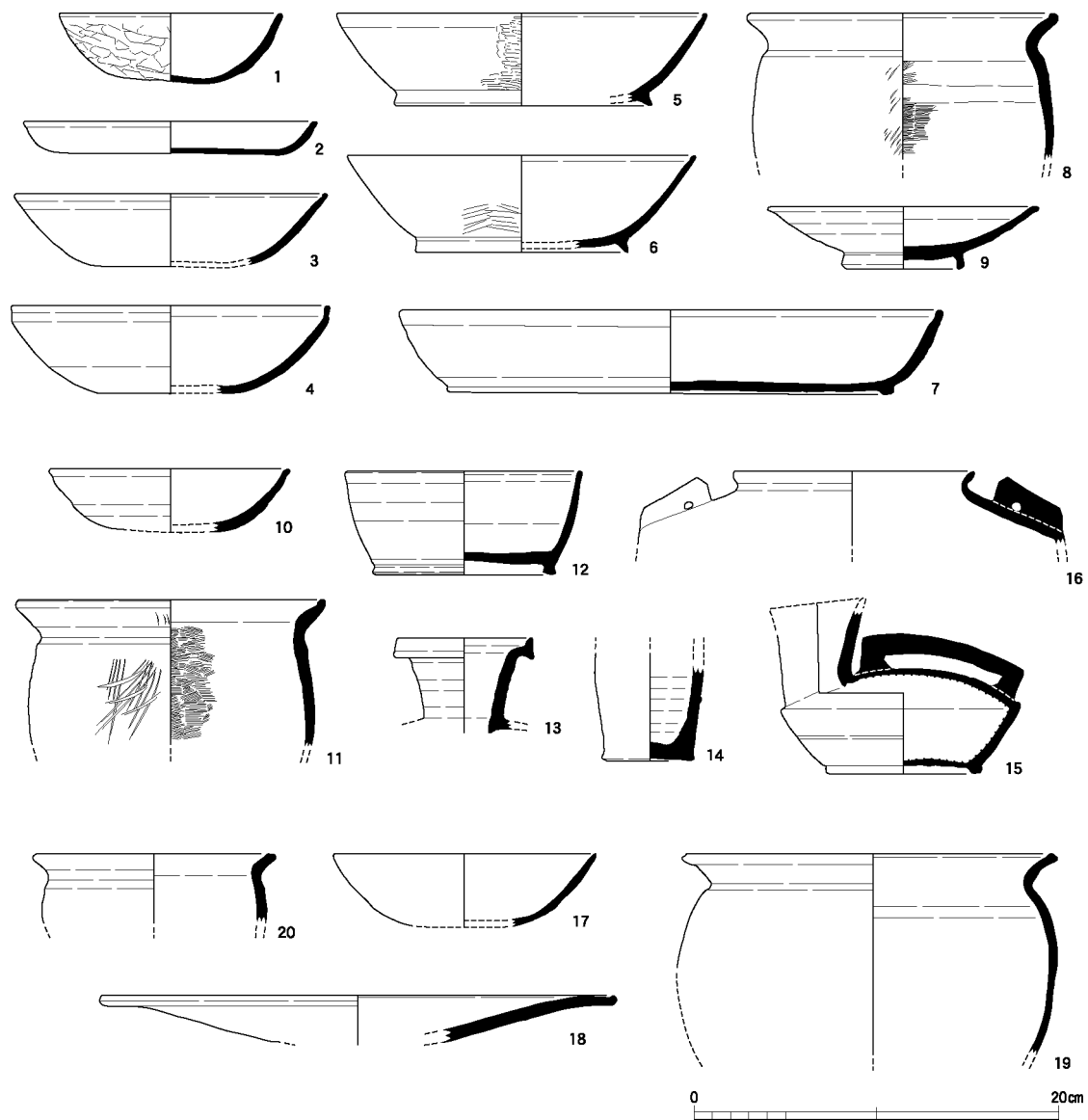


図11 遺物実測図1 (1 : 4)

があり、赤色塗彩土器である。底部の切り離しはヘラ起こしか。

土師器甕（11） 体部には荒く、内面には細かなハケ目調整をする甕で、口径は17.0cmある。

須恵器杯 B（12） 杯 B は出土数が少なく、実測できたのはこの1個体だけであった。口径は13.0cm、器高5.7cmで、やや軟質の焼成である。

須恵器壺（13～16） いずれも完形品にはならない。13は口縁端部を上下に拡張して面を作る器形で、出土例の多いものである。14は静岡県伊豆半島で生産された壺 G で、糸切り痕が底部に残る。内面はロクロ目が顕著で、胎土は青灰色で硬質に焼成されている。15は平瓶で、溝の底に張り付いた状態で出土した。口縁部が欠けているが、他の部分は完存する。把手の付く頂部は盛り上がる。底部径は8.6cm、器高は9.5cm前後と推定される。16は2箇所に把手が付く大型の壺で、口径は12.1cm前後になる。

SD100出土土器（17～19）

土師器椀（17） 椀は外面をヘラケズリ調整するが、遺存状態が悪く一部しか観察できない。口径は14.3cm、器高は4.0cmと大型の器形となる。

土師器高杯（18） 高杯の杯部で、外面はヨコナデされている。口径は28cm前後になる。

土師器甕（19） 口縁部が「く」字状に屈曲する甕で、21などと同じく、体部外面には顕著な調整痕がない。口径は20.0cm前後を測る。

SK41出土土器（20）

土師器甕（20） 小型の甕で、SK41から出土した。口縁部はヨコナデするが、体部は未調整である。

柱穴出土土器（21～32）

土師器甕（21～24） 3タイプの口縁がある。21・22は口縁部が「く」字状に屈曲するもので、体部の外面には顕著な調整痕がない。23は口縁端部を内側に巻き込むもので、外面には幅の広いハケ目痕がある。24は口縁端部が三角形になるもので、外面には荒いハケ目調整をする。摂津型の長胴の甕に復元できる。21はP94、22はP175、23はSA 1 に伴うP84、24はP72から出土した。

土師器高杯（25） 口径24cmと大型の杯部が付く高杯で、脚部は棒芯で作られたものが付く。杯部の外面はヘラケズリするが、端部にはヨコナデが残る。SA 1 に伴うP79の底から出土した。

黒色土器鉢（26） 小型の鉢で体部は内彎し、端部でわずかに外側に屈曲する。外面にはヘラミガキ痕がある。P94から出土した。

須恵器杯（27） 底部から内彎しながら立ち上がり、端部に至る器形で、口径は15.1cm、器高は4.8cmと深い器形である。SA 1 に伴うP79から出土した。

須恵器壺（28） 底径3.6cm、器高10.5cm前後に復元される小型の壺で、内外面共にロクロ目が顕著に付く。SB 3 に伴うP111から出土した。

灰釉陶器皿（29） 端部がわずかに外反する皿で、外面の体部から口縁部はロクロナデし、内面はロクロナデの後にヘラミガキする。高台は台形であるが、少し外側に開く。内面にのみ釉をハケで塗布する。口径は14.8cm、器高は2.5cmである。SB 3 に伴うP164から出土した。

灰釉陶器段皿（30） 段皿の口縁部で、外面の下半は回転ヘラケズリ、上半はナデ調整する。施釉は内面だけで、外面にはない。SB 3 に伴うP113から出土した。

緑釉陶器素地皿（31） 素地の皿で、円盤高台の底部から、ほぼ直線的に開きながら端部に至る。口縁端部の一部には両側から打ち欠いた跡が残る。口径は16.0cm、器高は3.4cmである。SA 1 に伴うP79の底から出土した。

包含層出土土器（32～36）

各種の土器が出土したが、実測できるものは少ない。

須恵器壺（32） 短頸壺で、出土例の少ない器形である。器壁は薄く、丁寧に調整している。口径は6.2cmで、器高は12.0cmある。

緑釉陶器皿（33・34） 33は口縁部が屈曲する皿で、台形の高台が付く。外面体部と内面を密にヘラミガキ調整する。口径は14.4cmで、器高は2.4cmである。34は口縁端部の内面が凹む器形で、高台は削り出しの輪高台で、全面に施釉する。

緑釉陶器椀（35・36） 35は削り出しの輪高台の椀で、体部は内彎し、端部は外反する。全面

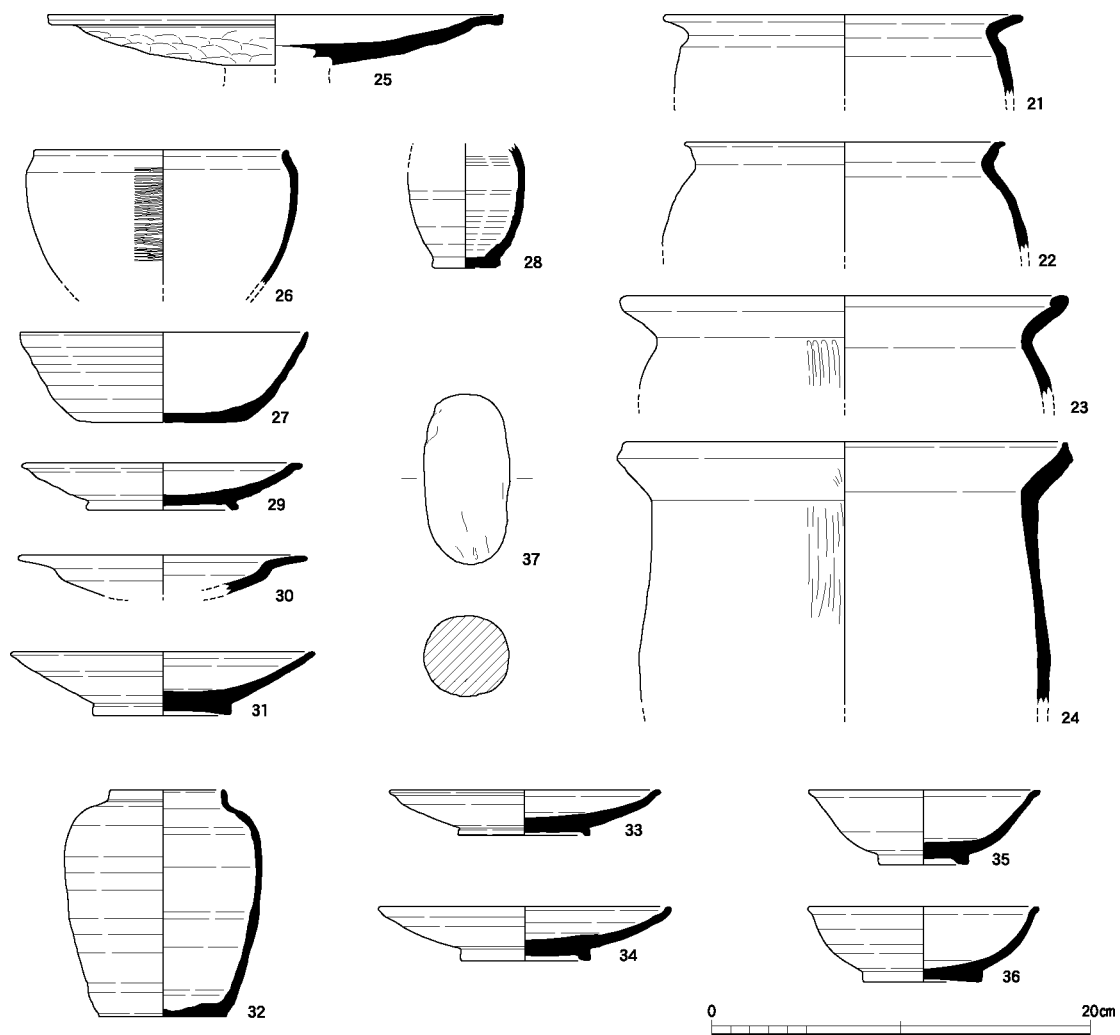
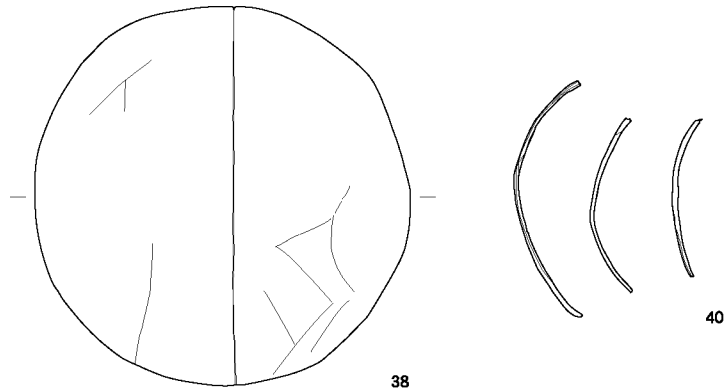


図12 遺物実測図2（1：4）

施釉で、内面には直接重ねた痕跡がある。口径は12.2cm、器高は4.0cmである。36は円盤高台の椀で、内彎しながら立ち上がり、端部はわずかに外反する。全面施釉の陶器である。口径は12.2cmで、器高は4.0cmである。



(2) 瓦類

軒丸瓦が2点出土している。いずれも細片であるが、平安時代前期に属するものである。

(3) 石製品 (図12 37)

SA 1に伴うP84から棒状に加工した石製品 (37) が出土した。長さ4.6cm、径は2.1cmで、用途・機能などは不明である。

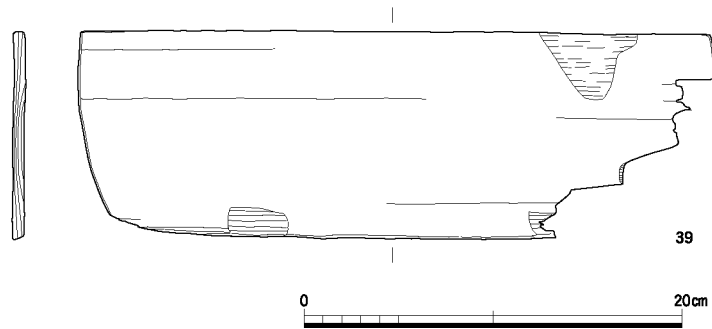


図13 木製品実測図 (1 : 4)

(4) 木製品 (図13~17 38~44)

木器などがSE200から数点出土した。形になるものは底からの出土で、曲物底板、折敷底板、円形に湾曲させた蔓状の束がある。その他に、井戸枠板がある。

曲物 (38) 直径19.8cmを測る正目の底板、厚さは0.5cmの完形品である。周囲の6箇所に径0.03cmの穴が開き、側板を止めた木釘の痕跡と推定される。

折敷 (39) これも底板であるが、全体の1/3ほどが残る。最大幅は33.5cmで、これが一辺の大きさと推定される。板の厚さは0.06cmで、板目材としている。腐食している部分もあり、全体



図14 曲物



図15 折敷



图16 SE200井戸梓板実測図(1:10)

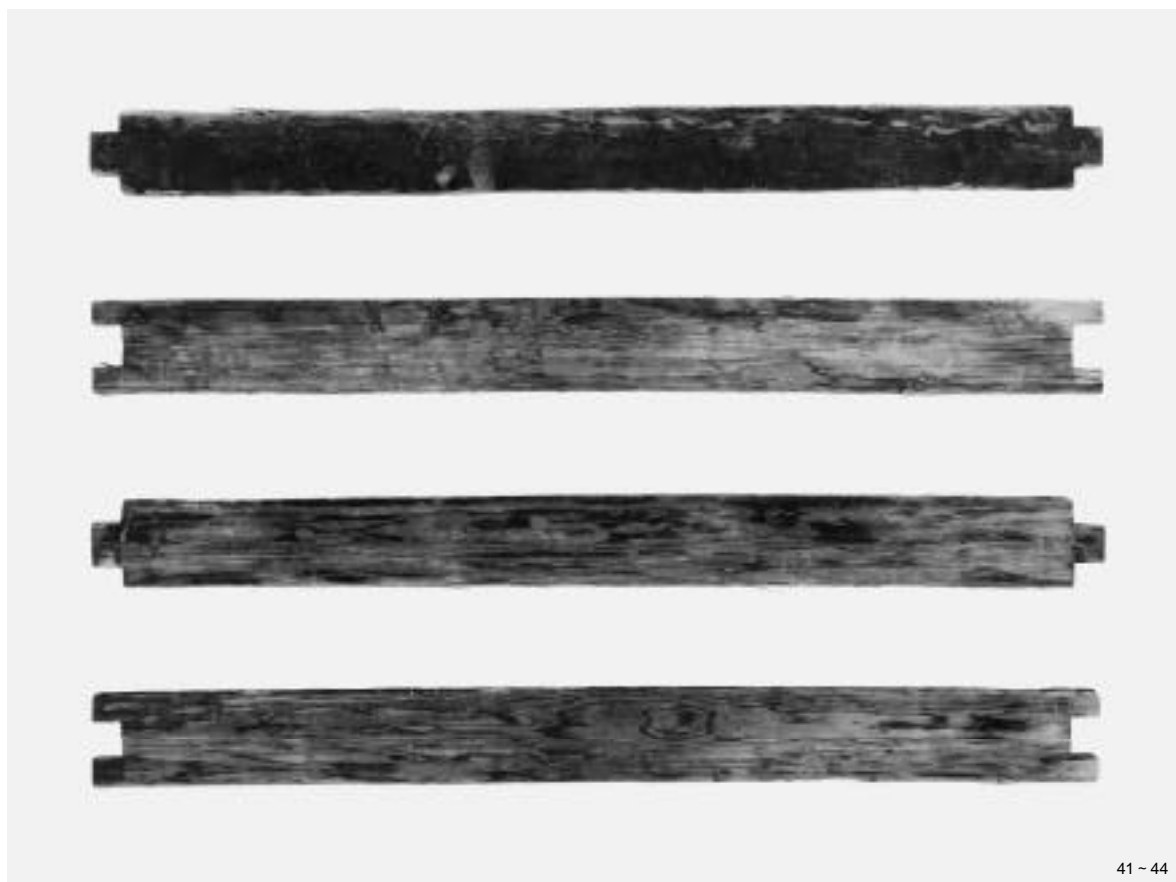


图17 SE200井戸梓板

はわからないが、側の2箇所に木釘の痕跡がある。

蔓状植物(40) 井戸の北西部から径がほぼ19cm前後となる湾曲した蔓状植物が10本前後出土した。これだけでは機能しないので、当初は竹駕籠に使われて、竹だけが朽ちたものかと推定される。

井戸枳板(41~44) 枳板は、厚さが4.5cm、長さが133cmで、幅は12cm前後である。南と北辺は幅5cmほどの切り欠きを作り、対する西と東の枳は両端を突出させ、組み合わせていた。板材は柱材などの転用で、幅が広い1面だけが風化し、その面を掘形側の見えない面に使うが、他の面には手斧で整形した痕跡が明瞭に残る。幅の12cmを3回で削ることから、その幅は5cm前後と推定される。

5.まとめ

試掘調査の結果を受けた発掘調査であったが、平安時代前期の条坊遺構・建物遺構や右京が荒廃した後に行われた耕作地化の過程を示す溝の検出など多くの成果を上げることができ、面的な調査の重要性を示した調査でもあった。以下、代表的な数項目に限って成果と課題を示しておく。

条坊遺構

樋口小路南側溝はプランや堆積状態から大きく3時期の変遷が想定される。当初は幅の狭い溝を掘り、流れも緩やかであったが、右京での表面水を処理する過程で、道祖大路が河川化され、関係する小路側溝も規模を上げ、流量を増加させ、下層の砂礫層の堆積となった。その後は中層に泥土層が堆積していることから、流れが緩やかになり、都市の排水機能の大半は道祖大路に移ったものと推定される。上層は側溝としての機能が終わり、埋め戻された土層である。

道祖大路の西側築地は、トレンチ東外の3m程の位置に想定されている。検出したSD100西肩はラインに出入りがあり、その成立時期は9世紀中葉頃である。この時に大規模な河川が道路部分に設定されたものか、または西側溝の規模拡張であったのかは、確認できていない。肩のラインが不定形であることを考慮すると、道路全域に設定された河川の一部とも考えられるが、SA1がこの堆積上で検出されることから確定はできない。大路の反対側で検出(図18)した流路の幅については、今回の調査では明確にできなかった。

宅地に関係した遺構

宅地内の遺構には、建物・柵・井戸がある。最古の遺構はSE200で、最下段の残った枳板内で出土した土師器から、遅くとも9世紀第1四半期には構築されたことがわかる。

建物遺構は、調査区に収まるものは無く、すべて部分的な検出にとどまった。これまでの右京六条三坊での建物規模や配置をみると、桁行4間や5間で一方に庇を持つ建物が多く見受けられ、北に対して西に振れるもの、正方位のもの、東に振れるものなどがあることがわかっていく。調査事例から、西に振れるものが古く、東に振れるものが新しいことがわかる。今回検出した建物や柵にも、西に振れるSB2、正方位で建てられたSB1などがあり、遺構に変遷があること

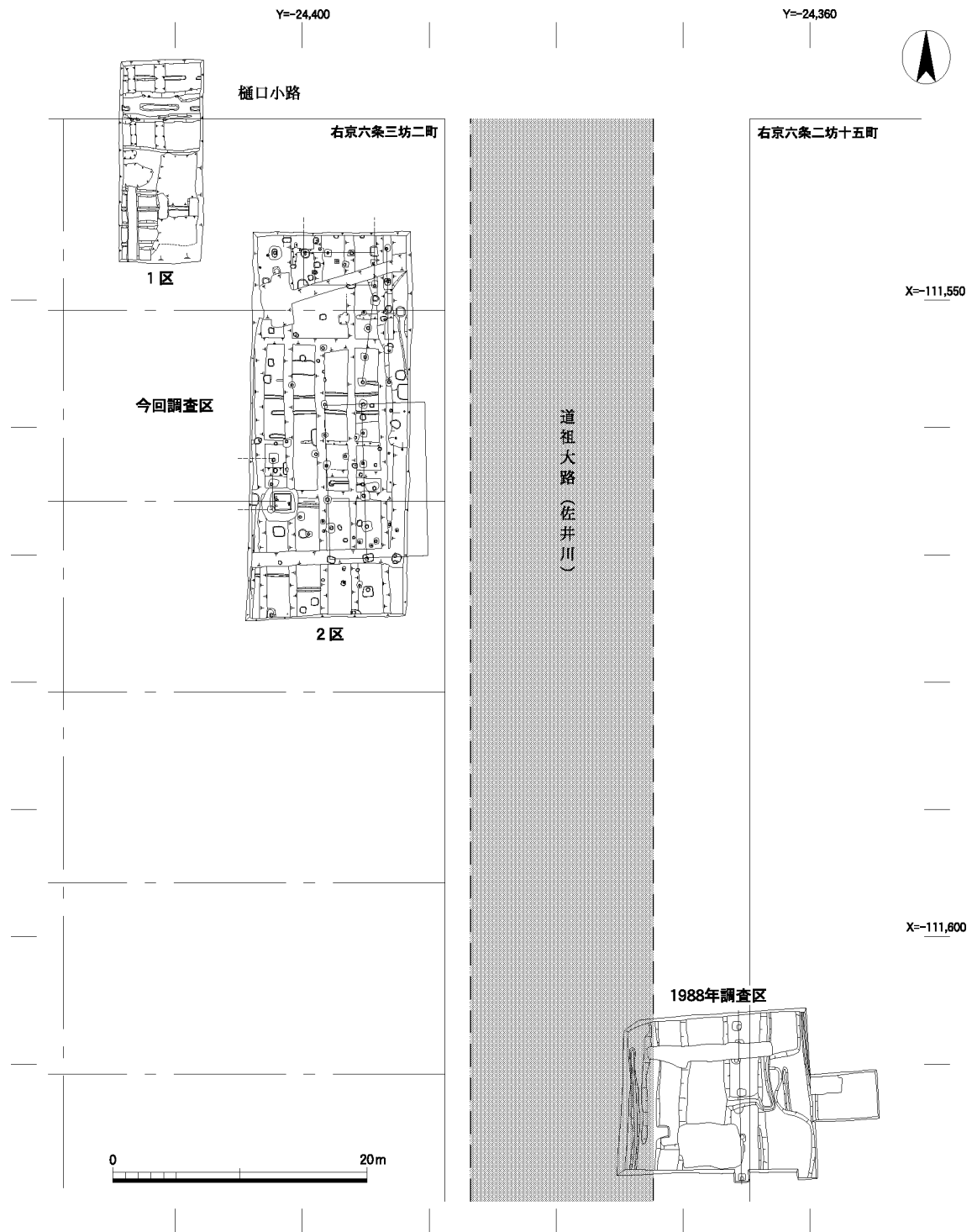


図18 周辺遺構関連図 (1 : 500)

がわかる。

建物配置については、庇付き建物を中心に数棟からなる組み合わせをみてとれる。占地については八町で、1/2町から1町の変遷、七町で南北方向の小径で分割される1/2町、四町で東西方向の小径で分割される1/2町から1町への変遷がみられるなど、規模の大きな宅地班給が施行された坊であったとみられる。今回検出した宅地も、それに近いものと思われるが同町の調査例が少なく不明である。

出土遺物について

古代から中世に関係する遺構・包含層については遺物の破片数をカウントし、遺跡の実態評価の一手段とした。カウントした総量は9,786点で、土師器が67%、黒色土器が4%、須恵器が24%、灰釉陶器が3%、緑釉陶器が1%、その他が1%であった。土師器の器形では、供膳形態が85%、煮沸形態が15%で、後者も一定量を占めている。須恵器では、供膳形態が27%、貯蔵形態が73%で、甕は須恵器の54%と大半を占めていた。

これらから古代土器の構成をみると、須恵器が一定量あり、平安時代前期の特徴を示しているが、供膳具は少なく壺・甕が多数を占め、供膳具から須恵器が退場する段階であることがわかる。中世の遺物は、土師器・瓦器・国産陶器・中国青磁が累計しても50点ほどで、宅地としての土地利用はされなかったことがわかる。

註・参考文献

- 1) 吉崎 伸「平安京右京六条二坊2」『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1993年
道祖大路の路面にあたる部分で、南北方向の平安時代中期以降に開削された河川を検出している。
- 2) 「平安京右京六条三坊七・八町発掘調査現地説明会資料」2001年9月14日 (財)古代学協会・古代学研究所
- 3) 鈴木廣司「右京六条三坊」『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要(発掘調査編)』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1983年
- 4) その他の平安京右京六条三坊の調査は以下の通りである。
 - 一町 前田義明「平安京右京六条三坊」『平成2年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1994年
 - 四町 平尾政幸・梅川光隆「平安京右京六条三坊」『昭和61年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1989年
 - 菅田 薫「平安京右京六条三坊」『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1994年
 - 家崎孝治 梅川光隆『平安京右京六条三坊 - ローム株式会社社屋新築に伴う調査 - 』 古代文化調査会 1998年
- 5) 前掲1)の調査の他、三條二坊十四町の調査でも流路の東肩を検出しており、路面を流路として9世紀後半に開削したことが報告されている。
 - 南 孝雄「平安京右京三條二坊」『平成10年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2000年

圖 版

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょううきょうろくじょうさんぼうにちょうあと							
書名	平安京右京六条三坊二町跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報							
シリーズ番号	2003-7							
編著者名	百瀬正恒							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2004年2月27日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょううきょう 平安京右京 ろくじょうさんぼう 六条三坊 にちょうあと 二町跡	きょうとしうきょうく 京都市右京区 さいいんことぶきちょう 西院寿町	26100		34度 59分 39秒	135度 43分 58秒	2003年10月 6日～2003 年11月28日	478m ²	マンション 建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
平安京右京 六条三坊 二町跡	都城跡	平安時代前期	樋口小路南側溝、 建物、柵列、井籠 組井戸、溝、土壇		土師器、黒色土器、須 恵器、緑釉陶器、灰釉 陶器、木製品		平安時代前期の井 籠組井戸、樋口小 路南側溝を検出し た。	

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2003-7

平安京右京六条三坊二町跡

発行日 2004年2月27日

編集発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 075-256-0961